

支部の役割と首都圏支部化の動き

神崎忠男

100周年事業を機に首都圏支部化への動きが推進され、昨年(平成19年)度、新たに栃木、茨城、千葉の三つの支部が誕生し、全国28支部となりました。また、ここに至り、新しい法人制度への対応と並行して支部化促進の機運が高まり、設立の可能性の高い東京多摩地域の「多摩支部設立懇談会」が、6月13日、当会会議室で開催されました。多摩地域在住会員は約465名、26市2町から約20名近い会員が集まり懇談いたしました。

すでに『山』1月(752)号で「公益社団法人化推進と首都圏ブロックの支部化」と題して、宮下秀樹会長が述べているように組織の活性化、きめ細かい活動、平等性、公平性など、支部化は新しい法人制度の施行に合わせて体質、組織を変えるひとつのチャンスです。これからの時代の流れと認識して、しっかりとした支部化基本要項作成に基づき、次の段階に進もうと懇談会を終えました。

新三支部の会員、関係者からも「創設してよかった」という声が多く聞かれます。まだ支部に加入していない会員にも支部化への理解と積極的な参画を望みたいと思います。

2007年の資料ですが、全国会員数約5550名のうち3100名が支部所属会員(56%)で、首都圏の支部未加入会員が2050名(37%)、その他海外在住者、外国会員など400名(7%)という状況下で、東京近在、首都圏会員は本部活動の傘下のなかで支部意識も希薄になりがちです。地方支部の会員は通常会費の他に支部会費まで納め、かつ本部施設の利用行事への参加もままならない環境のなかで運営、活動に従事し、自分たちの努力で日本山岳会を支え、クラブライフを楽しんでいます。

最近では支部間の交流、情報交換も盛んとなり、北海道支部と九州支部の南北登山交流、日本真ん中五支部(京都、岐阜、福井、石川、富山)懇談会、また、新たにできた栃木、茨城、千葉・新支部懇親会など、支部の運営、活動の活性化のなかでクラブライフを楽しんでいる報告が入ってきます。このような現状からも支部化による組織づくり(機構改革)を整え、会員のクラブライフは支部の運営、活動のなかで支部の特性を生かして実践していくべきではないでしょうか。本部機構は組織全体の運営、社会貢献、登山界奉仕、国際交流などグローバルな活動のなかで行なうべきだと考えます。社会や国民に信頼され「登山」の環境づくりの登山集団、格式、品格、モラルやマナーのある組織として存在するべきではないでしょうか。いい意味でのステータスの高い、会員が誇りと自信のもてる組織づくりの一環として、今後も支部化推進を図っていききたいと考えます。

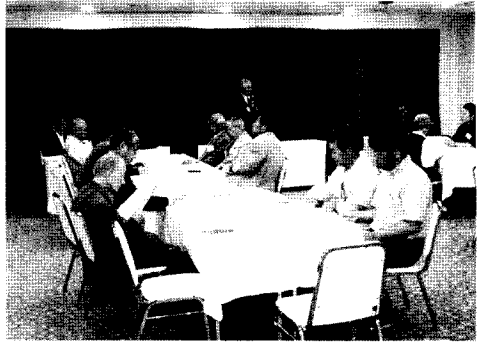
首都圏三支部の成果と課題

支部で仲間づくり

栃木支部は昨年5月27日に会員33名をもって設立しました。本年度の支部通常総会は去る5月24日に開催し、この時点での会員は43名、1年間で10名増えたことになりました。

今年度の通常総会の折、日下田支部長から次のような挨拶がありました。「私事になりますが、私は今まで狭く深い山登りをし、その延長でマナスルまで行ったわけで、国内の山は穂高岳以外ほとんど知りません。支部設立を機に今後は支部の皆様と故郷の山を歩いてみたいと思います。また、今後は公益法人化の動きともあいまって、支部の仲間を増やし、青少年(高校連の高校生を中心に)に山登りのおもしろさを教えるようなことも踏まえて、支部活動の活性化につなげていきたいと考えています」

この支部長の挨拶のなかに本支部の成果と課題が凝縮されています。成果は、なんとと言っても仲間作りです。本支部のような小さな支部が、支部設立を機に10名の会



通常総会で挨拶する日下田支部長

員(30〜40代が5名)を得たということは大きな成果です。地域の仲間との絆を深め、日光や那須の山々に恵まれた地の利をいかし、これまでのどちらかと言えば本部指向型の活動から、地に足がついた活動が始まっています。日下田支部長が昨年の支部山行で栃木県の最高峰白根山に初めて登ったとの話は、参加者に大きな驚きでもありましたし、興味深いことでもありました。アルパインクラブである以上、その前提は登山活動であり、その精神はパイオニア・スピリットがベースになければなりません。本支部は、故郷の山からヒマラヤまで、夢多き登山を志向する集団であります。

課題は、私たちの活動を後進に確実に伝えていく責務を果たすことです。幸いに本支部員には高校の教員も多く加入しており、県山岳連盟の役員になっている方達もおります。こうした関係を活用して、若い登山者の育成に一石を投じ、いずれは本支部の会員として一緒に活動していくことが必要です。支部活動の活性化にはクラブとしての世代の継続性が不可欠です。

現代の若者は、電子映像メディアに毒されています。この現実、若者から人間らしさを奪い体力を奪い気力を奪っています。自然の中で遊ぶこと、体験することのおもしろさは人類がこの地上に誕生してから揺るぎのない活動として継続されています。本支部では社会貢献事業として講演会や映画会を開催し、このようなことを理解し推進するおとなを1人でも多く巻き込み、地域の若者がチャレンジ精神をもって活動できるように努めています。

私たちおとなが夢を持って生き生きと登山活動を行なうこと、そのことが若者の登山離れを阻止することに繋がると確信しています。

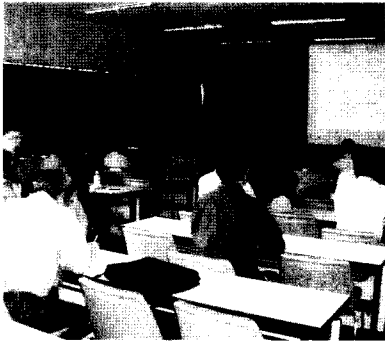
(栃木支部事務局長 渡邊雄二)

実り多い公開講演会

昨年6月15日に土浦市内にて設立総会を開催し、日本山岳会の27番目の支部として正式に発足して、1年目を迎えた。

当初21人の会員で発足したが、現在26人となり、この1年間で5人の新しい会員を迎えることができた。毎回数30人の一般市民へ向けた公開講演会は、2カ月ごとに開催され、今日まで6回にわたって実施してきた。とくに第1回目と本年の創立記念講演会の2回は、星埜支部長(国土地理院前院長)による「伊能忠敬に始まる科学的地図」および「景観と地図」についてきわめてわかりやすい内容で、聴衆に大変好評だった。

また2回目の奥井支部長代行(京大薬学OB)による「免疫化学について、抗原と抗体との化学反応」のトピックスは、近年のハシカの流行との関連で参加者の高い興味を惹くところとなった。また3回目の私の「富士山測候所の現状と未来」についての話題も、聴衆に高い関心を呼ぶことができたようだ。さらに4回目の酒井会員による「聖山カイヤスを巡礼して」



毎回好評の茨城支部による公開講演会

も、外国での山行の魅力を抱かせるに十分なものであった。また5回目の川久保会員による「崑崙山脈西部の山旅と高所順応について」は、地元紙の常陽新聞の取材を受け、5月22日の朝刊に写真入りで詳細な紹介記事が掲載された。山行については、第1回(9月29日)の筑波山登山を最初に、今日まで隔月ごとに5回実施してきた。このなかに本年2月に日光で開催された栃木、千葉、茨城の三支部合同懇親山行が含まれている。2009年2月は千葉、2010年2月はわが支部が主催し、順繰りに懇親を深める絶好の機会にしようと思画している。

今後の課題としては、まず会員の増加があげられる。このためには、日本山岳協会の茨城県山岳連盟および高体連登山部との交流を深めていくことが肝要と思われる。またこの度、本支部に支部友制度を創設した。この制度を活用して特に若い人の参加を期待したい。また活性化のための方策として、山行、講演会および自然保護活動を着実に進めるとともに、とくにアンチエイジングと健康維持増進への登山の有効性を啓蒙していきたいと思っている。

(茨城支部事務局長 浅野勝己)

豊かなクラブライフ

2007年6月24日に設立総会を開催し、ちょうど1年が経過した。成果をと問われてもまだ答えるべきものを持たないが、あえて言えば1月25日に初回の有志懇談会を開催し、それから5カ月弱の短期間で設立に漕ぎつけたことである。理念として、「より楽しい、より豊かなクラブライフを目指し、新しい出会いの場を作る」ことを掲げた。奇をてらわず、まずは支部会員同志が顔を合わせ仲よくなることを考えた。さいわい、委員会はいいメンバーに恵まれ、山行、懇親会、自然観察会、講演



千葉の名峰、鋸山にて

会などの行事を行なうことができた。年次晩餐会では、地の利をいかし28支部のなかで一番多くの参加者を得た。設立所期の目的はそれなりに達成することができたと考えている。栃木支部の提案により、日光湯元で栃木、茨城、千葉三支部合同の懇親会が開催された。本部からも宮下会長ほかの参加者を得、新支部同志での貴重な懇親、そして情報交換の場とすることができた。千葉支部は、東京に隣接する唯一の支部である。設立検討時には、千葉在住の会員には、すでに同好会、同期会あるいは各委員会に所属し、そこを止まり木として活動する会員も少なくなかった。今さ

ら支部の存在は不要とも言われた。設立検討に際し、最も悩んだのはこの点であり、果たしてどれだけの方が支部に加入してくれるであろうかとの不安は拭いきれなかった。結果としては、100名を超える人たちに参加していただいた。加入してくれた会員各位に感謝するとともに、これは大きな成果といえるであろう。これからの最も大きな課題は、この期待にこたえていくことである。本年5月に、第1回の通常総会を終えることができた。課題は、まずは支部行事の充実である。ついで、里山文化発信県の支部として里山保全活動への参画。登山を通じて地域へのボランティア活動等についても具体的な検討をはじめたい。委員会、同好会活動などに積極的に協力していくことも、東京に隣接する支部としての責務であろうと考えている。この総会で会友制度を新設することとした。支部の活動を正会員だけに限定せず広く会友にも支部行事に参加してもらうことにより、支部活動の活性化、ひいては地域貢献の一環としても位置づけていきたい。(千葉支部長 篠崎仁)